

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月21日現在

機関番号：32717

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530060

研究課題名（和文）地球環境危機における複雑系グリーン犯罪学に関する研究

研究課題名（英文）Research on Complexity Green Criminology in Global Environmental Crisis

研究代表者

竹村 典良（TAKEMURA NORIYOSHI）

桐蔭横浜大学・法学部・教授

研究者番号：60257425

研究成果の概要（和文）：複雑系グリーン犯罪学は、複雑系理論の研究方法に基づいて、時空横断的な環境犯罪・エコ犯罪を研究し、その対策を考える。地球環境を危機に陥れ破壊する環境犯罪は、先進国と途上国の間で不平等・不公正に配分されており、グリーン社会正義という理念と実践がますます重要になっている。水紛争を回避するための環境的正義と民主主義、生物多様性の危機・喪失を回避するための環境保全、原発事故による放射能汚染の拡大阻止等、課題は山積している。

研究成果の概要（英文）：The complexity green criminology makes a research on trans-time/space environmental crimes or eco-crimes and considers fighting methods against them based on the research methods of complexity theory. Bad influences of environmental crimes or eco-crimes, which bring our global environment to a head and destroy it, are unequally and unfairly distributed between advanced nations and developing nations. Facing this situation, the philosophy and practice of green social justice becomes more and more important. We have piles of work to do: the environmental justice and democracy which avoids water conflicts, the environmental preservation which avoids crisis/loss of biodiversity, the detention of expansion of radioactive contamination caused by nuclear power accidents, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：刑事政策、犯罪学、刑事法

科研費の分科・細目：法学・刑事法学

キーワード：地球環境危機、環境犯罪、エコ犯罪、複雑系グリーン犯罪学、グリーン社会正義

1. 研究開始当初の背景

(1) 「複雑系犯罪学」「リスク社会における犯罪統制」「国境を超える組織犯罪」の研究を進める中で、これらに共通する問題として「人類の存在を危機に陥れる地球環境の悪

化及び破壊に対して犯罪学はいかにあるべきか」という課題が現れてきた。すなわち、地球環境及び社会経済システムは複雑系システムとして捉えられ、人間社会の発展は環境悪化・破壊というグローバルなリスクを内

包するようになり、環境の悪化・破壊が国境を超えて諸個人・諸集団によって組織的に行われている。このような状況に直面し、現代及び将来における危機的な状況を捕捉し、克服の方途を見出すためには、「地球環境危機における複雑系グリーン犯罪学の研究」が必要である。

(2)本研究に関連する国内国外の研究動向及び位置づけとして、単発の研究を集大成したのものとして、Nigel South と Piers Beirne の編集による『Green Criminology』及び『Issues in Green Criminology: Confronting harms against environments, humanity and other animals』があるが、複雑系犯罪学の方法に基づいて体系的に「地球環境危機における複雑系グリーン犯罪学の研究」を行ったものは国内・国外ともに存在しない。

2. 研究の目的

(1)本研究は、これまでの犯罪学に「環境問題に関する社会的思考」が欠如していたことを認識し、地球環境保護（グリーン）の視点を犯罪学に加えることによって、21世紀においてきわめて重要な問題となっている地球環境の悪化・破壊による現在及び将来の人類の生存の危機について考察することによって、グローバル・リスク社会における複雑系グリーン犯罪学という新たな犯罪学の領域を開拓する。

(2)また、「グローバル・リスク社会における複雑系グリーン犯罪学」という新たな視点から、現在及び将来の人類が直面している地球環境及びその悪化・破壊という生存の危機に関して考察し、これまでの犯罪学の分析枠組みでは対処することができなかった諸問題について現象形態・特徴を明らかにし、現在及び将来における具体的な政策を提案する。

3. 研究の方法

(1)第一に、環境問題に積極的に取り組み、理論的実践的経験を蓄積しているヨーロッパ諸国に関して、環境犯罪の現状及び対策について情報を収集し、分析・検討し、わが国及び国際社会における今後のあり方について考察する。この研究成果を平成20年7月に開催される国際犯罪学会（バルセロナ）において発表し、諸外国の研究者・実務家等と意見交換し、本研究にフィードバックする。

(2)第二に、近年において環境の悪化・破壊の問題に直面し、未曾有の諸問題に苦悩している開発途上国及び後進国に関して、環

境犯罪の現状及び対策について情報を収集し、分析・検討し、わが国及び国際社会における今後のあり方について考察する。これらの研究成果を国際学会において発表し、諸外国の研究者・実務家等と意見交換し、本研究にフィードバックするとともに、国際的な共同研究に発展させる。

4. 研究成果

(1)平成20年度は、「環境犯罪の有害な影響の先進国・途上国間および世代間における不平等・不公正配分」について調査研究を行った。

①環境犯罪は地球ならびに私たちの生存にはなほだしく有害な影響を及ぼしてきた。とりわけ、その有害な影響は先進国と開発途上国の間で不平等かつ不公正に配分されてきた。二酸化炭素の排出による地球温暖化を克服するために推進された代替エネルギー政策の展開に見られるように、富裕な先進国に住む人々に利益をもたらす方策が、貧困な開発途上国に住む人々に不利益をもたらした。このような問題に対処するためには、生産と消費の無限の拡大を標榜する近代資本主義の原理を改め、社会正義に基づく新たな社会ならびに生活様式を創出しなければならない。

②また、過去数十年にわたって、富裕国は貧困国を汚染と廃棄物の掃きだめとして使用してきた。企業と産業は環境規制の緩やかな場所を積極的に求めるがために、先進国における厳格な環境基準の実施による環境の質の向上は、開発途上国における汚染産業の発展と有害廃棄物の投棄をもたらした。「環境的正義」は、環境的な害悪と利益の配分、およびその配分を検討し決定する手続きへのアクセスにかかわる。正義は、あらゆる人々の公正で道徳的で平等な扱いにかかわる概念と定義される。配分的ならびに手続的正義が環境的正義では重要である。

③地球環境破壊をもたらす環境犯罪に立ち向かうための「環境的正義」は、以下の3つの主たる領域によって構成される。すなわち、将来の世代に向けての正義（世代間正義）、生態学的正義（人間以外の存在に関連する正義）、人類の空間の内部における配分の社会的局面（世代内正義）である。カオス・複雑系グリーン犯罪学は、「複雑系グリーン正義」という多様な概念と運動により、環境危機のグローバルな臨界状態を克服することを提唱する。

(2)平成21年度は、「温暖化による氷冠の融解」および「グローバルな水危機」について調査研究を行った。

①まず、現地調査として、いわゆる地球温暖化の影響が著しく現れているとされるグリ

ーンランドを訪れ、氷冠 (ice cap) の融解現場を調査し、カンゲルルススアーク資料館において資料収集をし、現地の居住者にインタビューを行った。それらによると、世界的に話題になるかなり前から氷冠の融解が見られ、危機状況を認識していたが、近年、その度合いが加速している。

②環境犯罪は水の危機を激化するおそれがある。国連レポートによると、世界中で 12 億の人々が安全な飲料水を手にすることができない。地球温暖化や人口爆発が水の欠乏をますます重大な問題にする。水不足という危機が人々の間に不平等に配分されているため、貧しい人々はその生存の危機に直面している。近年では、世界中で水を争う多数の紛争が起こっている。

③三つの水危機 (新鮮な水の供給の縮減、水への不公正なアクセス、企業による水の管理) は、地球および私たちの生存に対する最大の脅威である。今後、私たちが正しい方向に行動様式を変えなければ、国家、貧困者と富裕者、公益と私益、都会の人々と地方の人々、新鮮な水の不足をめぐる紛争が激化し、潜在的戦争が現実化するおそれがある。

④グローバルな水不足は多数の人々を貧しく傷つきやすく安全でない生活に押しやる。グローバルな水の危機は、物理的な入手可能性ではなく、権力、貧困、不平等に起源がある。人々は水に対する権利があり、水へのアクセスと公衆衛生が得られないことは、生活を脅かし、機会を奪い、人間の尊厳を蝕む、剥奪の一形態である。環境に対する有害な政策ならびに実践は犯罪の一形態として特徴づけられ、グローバル化に伴い生じる環境に対する有害行為あるいは犯罪に対して、特別な注意が向けられなければならない。

(3)平成 22 年度は、「生物多様性の喪失と犯罪」について調査研究を行った。

①まず、生物多様性の宝庫として世界自然遺産に登録されながら、近年その喪失が著しいとして世界危機遺産とされたガラパゴス諸島を訪れ、現状と課題について実地調査した。

②世界の多くの地域で生物の多様性は急速に失われ、過去 50 年間に急速かつ大規模に生態系を変えてしまった。熱帯林や多くのウェットランド、その他自然の生息・生育地は規模が縮小し、種は自然の摂理によって発生してきた絶滅の標準的な速度の 1,000 倍の速さで失われようとしている。生物多様性は、人類が全面的に依存している基盤であり、生物が多様な生態系は、必要不可欠な財 (食糧、水、繊維、薬) を提供するばかりでなく、病気や土壌の侵食を制御し、大気や水を浄化し、省察を促すなど、かけがえのないサービスを提供する。

③また、現在世界中で貧困に苦しんでいる

人々が、生物多様性の喪失による悪影響を最も受けることになる。貧困層は、生活に不可欠な要素を生態系に依存しており、苦境の時には生態系に依存することで苦難を乗り越えている。生態系がもたらすサービスが途切れると、これらの貧困層にとってはこれに代わる生活手段がない。生物多様性は人類の生存にとって不可欠であり、すべての人は生物多様性の保全および持続可能な利用から恩恵を受けるという平等の権利を持つ。

④さらに、これまでの研究の中間報告として、平成 22 年 4 月にサルバドール (ブラジル) で開催された国連犯罪防止会議に研究報告書を提出し、国連公式文書として登録された。

(4)平成 23 年度は「森林伐採による環境破壊と生物多様性の危機」および「原子力発電所事故による放射能汚染と環境破壊」について調査研究を行った。

①森林伐採による環境破壊が著しく、それに伴い生物多様性が危機にさらされているマダガスカルの現状と問題点について調査研究を行った。毎年 10 万~20 万 ha に及ぶ土地が森林破壊により失われ、特有の多くの植物や動物が絶滅の危機に直面している。東部には 1,200 km にわたって南北に伸びる森林地帯があり、マダガスカルに現存する最後の低地熱帯雨林が数種見られるほか、広大な手付かずの原生林が存在している。しかしながら、この森林地域は焼き畑農業や森林伐採による大きな被害を受け、生物多様性が脅かされている。地域及び国家レベルで取り組みが始まっているが、必ずしもその効果が上がっているとは言えない状況である。

②福島第一原子力発電所の事故をきっかけとする放射能汚染による環境破壊の現状、将来予測、問題点について調査研究を行った。福島第一原子力発電所の事故により、放射性物質が放出・漏出されたことから、放射能汚染により生態系ならびに地球環境が重大な危機に晒されている。これらは産官学の複合体によって犯された環境に対する重大犯罪の一つと考えられる。福島第一原発事故は過去最悪とされるチェルノブイリ原発事故と並ぶレベル 7 の評価がなされ、世界中で反原発の動きが活発になっている。原子力カルネサンスと称され「万能薬」とされてきた原子力発電所の危険性が明らかになった。また、地球環境の放射能汚染は生態系と地球環境に対する致命的な環境犯罪と考えられ、複雑系グリーン犯罪学・被害者学の観点から、時間と空間を横断する環境犯罪であると考えられる。

(5)得られた成果の国内外における位置付けとインパクトについて、これらの研究成果は、国際犯罪学会、ヨーロッパ犯罪学会、アメリカ

カ犯罪学会、ストックホルム犯罪学シンポジウムでそれぞれ発表し、諸外国の研究者・実務家等と意見交換し、国際的な共同研究に発展している。環境犯罪およびグリーン犯罪学に関心を有する世界中の研究者のネットワークが構築され、研究書『気候変動、犯罪、犯罪学』（英文）の編集が進んでいる。また、環境犯罪に特化した国際専門雑誌『グリーン犯罪学』（英文）刊行の準備が進められている。

(6)今後の展望として、環境危機・破壊の問題は、グローバルな空間的広がりばかりでなく、過去・現在・未来という時間的広がりも見られ、共時的研究ばかりでなく、通時的研究の必要性を認識するに至った。環境破壊犯罪と文明崩壊の関係に関する通時的・共時的研究を行う。第一に、環境破壊犯罪と文明危機・崩壊の関係について、「複雑系グリーン犯罪学」の方法に基づいて分析する。第二に、環境破壊犯罪の諸問題を過去における文明崩壊、及び、現在における文明危機との関係の中で捉え、環境破壊犯罪と文明社会の関係に関する歴史研究を行う。環境破壊犯罪と文明社会の滅亡・存続に関する通時的・共時的研究を展開し、環境破壊犯罪と文明社会の盛衰に関する時間的空間的理論を構築する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Noriyoshi Takemura, Crisis of Global Biodiversity and Complexity Green Criminology, 桐蔭論叢、査読無、25巻、2011、51-62、
- ② Noriyoshi Takemura, Water Crisis, Water Justice and Water Democracy: One Aspect of Struggle for 'Green Social Justice' as 'Applied Complexity Green Criminology', 桐蔭論叢、査読無、23巻、2010、45-65、
- ③ Noriyoshi Takemura, Factitious Catastrophe, Global Warming, and Chaos/Complexity Green Criminology/Justice—Tug of war: environmental 'injustice' vs 'green social justice' 1—、査読無、21巻、2009、83-93、
- ④ Noriyoshi Takemura, Hazardous Waste Trafficking, Human Right to Clean Environment and Environmental Social Justice—Tug of war: environmental 'injustice' vs 'green social justice' 2—、査読無、21巻、2009、95-105、
- ⑤ Noriyoshi Takemura, Environmental Risks/Crimes of Nuclear Power Plant and

Complexity Green Criminology、査読無、19巻、2008、81-88、

[学会発表] (計10件)

- ① Noriyoshi Takemura, Fission and Fusion of time/space theory for complexity green criminology, 63rd Annual Meeting of American Society of Criminology, Nov. 16-19, 2011, Washington D.C., U.S.A.
- ② Noriyoshi Takemura, Uncontrollable Complex Accident of Nuclear Power Plant and Fatal Environmental Crime/Harm, 11th Annual Conference of European Society of Criminology, Sept. 21-24, 2011, Vilnius, Lithuania
- ③ Noriyoshi Takemura, State-of-the-art 'Pandora's Box'? Uncontrollable Complex Criticalities of Nuclear Power Plant Accidents and Fatal Damages/Harms to Global Environment, 16th World Congress of International Society of Criminology, Aug. 5-9, 2011, Kobe, Japan
- ④ Noriyoshi Takemura, Crisis of global biodiversity and complexity green criminology, 10th Annual Conference of European Society of Criminology, Sept. 11, 2010, Liege, Belgium、
- ⑤ Noriyoshi Takemura, Global Water Crisis, Privatization and Complexity Green Criminology: Struggle for 'green social justice', 61st Annual Meeting of American Society of Criminology, Nov. 4-6, 2009, Philadelphia, U.S.A.、
- ⑥ Noriyoshi Takemura, Water Crisis, Environmental Crimes and Complexity Green Criminology, 9th Annual Conference of European Society of Criminology, Sept. 9-12, 2009, Ljubljana, Slovenia、
- ⑦ Noriyoshi Takemura, Spreading Environmental/Ecological 'Injustice' and Struggle for 'Complexity Green Justice', Stockholm Criminology Symposium 2009, June 22-24, 2009, Stockholm, Sweden、
- ⑧ Noriyoshi Takemura, Multiple Criticality of Environmental Crimes and Chaos/Complexity Green Criminology, 8th Annual Conference of European Society of Criminology, Sept. 5, 2008, Edinburgh, United Kingdom、
- ⑨ Noriyoshi Takemura, Global Criticality of Environmental Crimes and Chaos/Complexity Criminology, XV World Congress of International Society of Criminology, July 25, 2008, Barcelona, Spain、

〔図書〕（計4件）

① Noriyoshi Takemura, United Nations、
Transnational Crime/Harm/Injustice and
Struggle for Social Justice: Development
of Chaos/Complexity Criminology,
A/CONF.213/IE/8、2010、55、

② Rob White, Noriyoshi Takemura, et al.、
Willan Publishing、Global Environmental
Harm: Criminological perspectives、2010、
260 (210–227)、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹村 典良 (TAKEMURA NORIYOSHI)

桐蔭横浜大学・法学部・教授

研究者番号：60257425